

## ガチ中華

大松 達知

〈ガチ中華〉が、昨年の新語・流行語大賞にノミネートされたという。日本人向けに味が調整されていない、中国大陸そのままの味の中華料理を指す。横浜や神戸の中華街の味とも違う、遠慮なく辛くて、勢いのある味。(四川料理よりも辛い、湖南料理も多いし。)調理人も店員さんも中国人。これが東京に増えている。中国人の留学生や観光客が多いからか。彼らは海外でも中華料理をよく食べるのだと聞いたことがある。

というか、そもそも〈ガチ〉とはなんなのか。

「今日、古文やないと、ガチでやばい」「このじゃがりこ、ガチうまい」「あいつ、数学ガチ勢だし」と、高校生は呟いている。「ナカタ先生、ガチうざい」「それ、ガチきもくねえ?」と小学生の娘は嘆いている。

もともとは相撲用語の「ガチンコ」(真剣勝負)に由来しているようだ。真面目で、本気で、真剣に。マジ、マジで、では物足りない、激しく直接的な響きがある。ガチ降

り、ガチ恋、ガチ予想、ガチつけ麺。ガチ短歌もあるだろうけど、なんだろうか。もはや浸透しきっているのだろう。私も「そろそろガチで単語やれ!」なんて生徒たちに言っていた。若者ぶる気持ちがあることに、ひそかな驚きと恥ずかしさを感じて、悪くない。

さて、ガチ中華。そのメニューはわかるようでわからない。中国語的発音すらも定着している、青椒肉絲や棒棒鶏などとは違う。例えば、酸菜粉とか肉末油豆角とか地三鮮とか。その字面のミステリアスさに惹かれる。料理名は一種の符牒だからか。文学的とも感じてしまうのは、中国四千年の歴史に対する負い目か。疑似海外旅行を楽しもうとするささやかな抵抗か。

それぞれ、白菜の漬物と春雨炒め、豚ひき肉とインゲンの醬油炒め、ジャガイモ・ナス・ピーマンの醬油炒め。しかし、そう種明かしをされてしまうとなんだか興醒めた。日本語が冗長にも、どこか負けたようにも感じてしまう。音読みと訓読みの溝なのか。日本語ではカ・ラ・イと言い、中国語ではラーと言う。中国語はすべて音読み。当たり前だけど、それで不便はないのだ。

・CDをガチで虚空に積んでいく(あの子のため)(わたしのため)(生き延びるため) 田丸まひる

明日は、涼皮か尖椒肥腸か湘辣猪肝か。やっぱり炒飯と餃子かな。